

顕彰状

澤地久枝氏の膨大かつ多岐にわたる業績は、「昭和史の語り部」としての自負と責任に支えられて、営々と培われた。

澤地氏は1930年に東京で生まれた。4歳のとき、家族とともに満州（現・中国東北部）に渡り、吉林高等女学校へ進学したが、1945年、終戦によって日本に引き揚げてきた。山口県立防府高等女学校を経て、1949年に都立向丘高等女学校を卒業し、同年に中央公論社に入社。そして同社勤務の傍ら、都立第一高校定時制を経て、1954年に早稲田大学第二文学部を卒業した。『婦人公論』の編集次長を最後に同社を退社し、五味川純平氏の歴史小説『戦争と人間』執筆のための資料助手を約10年間勤めた。

資料助手として歴史資料を探索する過程で、二・二六事件に関与した青年将校の妻たちの悲劇に出会い、1972年には最初の歴史ドキュメンタリである『妻たちの二・二六事件』を発表。その明晰で論理性に富む文体と強靱な資料解読の能力に注目が集まった。1975年には戦後最年少のA級戦犯として処刑された人物の軌跡を辿った『暗い暦——二・二六事件と武藤章』、1978年には沖縄返還協定をめぐる国家間の密約が男女間のスキャンダルによって漏洩する状況を検証した『密約——外務省機密漏洩事件』を発表する。『石川節子』（1981年）は、貧しさと家制度の桎梏の中で自身を犠牲にし、啄木と同様に短い生涯を閉じた、天才歌人・石川啄木の妻の節子に着目した作品である。これらに代表されるように、歴史の裏舞台で葛藤し、忘れ去られていった人々の視点から、日本の近代の抱えていた問題を逆照射するアプローチは、氏の独自性として特筆すべきものである。

『火はわが胸中にあり——忘れられた近衛兵士の叛乱・竹橋事件』（1978年）では日本ノンフィクション賞、『昭和史のおんな（正・続）』（1980、1983年）では文藝春秋読者賞を受賞し、『滄海（うみ）よ眠れ——ミッドウェー海戦の生と死』（1984～1985年）と『記録 ミッドウェー海戦』（1986年）で菊池寛賞を受けるなど、日本を代表するノンフィクション作家として高い評価を受けている。史実への真摯な取り組みと、徹底した取材ぶりは、氏が私淑する大岡昇平氏の『レイテ戦記』にも匹敵するものであり、またリズム感に溢れた温か味のある文体は、いまもなお広汎な読者を獲得し続けている。

澤地氏は、戦前に「外地」と呼ばれた満州に育ち、終戦にともなって引き揚げ、東京を基点にジャーナリストとしてさらに昭和史研究者として活躍し、より深い昭和史探索のために、日本の近代化の問題が集約的に現れている沖縄の地に、60代半ばにして移り住んだ。こうした澤地氏の軌跡は、昭和という時代に翻弄された小国民が、そのうねりの正体を見極めようとして、歴史の証言者たちと対話を重ね、やがては深い洞察力に裏打ちされたノンフィクション作家へと成長する過程である。戦争体験を持たない世代が国民の過半を占めるようになった21世紀にあって、無名の人々の声を汲み上げる「昭和史の語り部」としての氏の役割は、ますます重要なものとなっている。

ここに早稲田大学は、澤地久枝氏の顕著な功績を称え、早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2003年3月25日

早稲田大学